

第1回 生活科研究部研修会

令和6年5月22日

会場 協同組合 浜松卸商センター アルラ

1 顧問校長挨拶

浜松市立河輪小学校 校長

夏に向けて、1年生は朝顔の種を蒔き、2年生は野菜の苗を植えた。「早く大きくなってね」という思いを込めながら毎日水をやる子供たちを見て、心を癒されている。子供たちが朝顔や野菜を育てる中で、どのように気付きの質を高められるかが大切であり、子供たちの成長をととても楽しみにしている。

講話を通して、幼児期との連携や、接続を意識したスタートカリキュラム、様々な教科での「見方・考え方」とのつながりについて学び、各学校の実践につなげてほしい。



2 講話「生活科授業の充実に向けて」

浜松市教育センター 指導主事

生活科の特徴として、低学年の先生だけが知っていればよいという間違った認識が全国的に広がっている。今回の学習指導要領の改訂の主役は生活科と総合である。今日の話聞いて、学校の主役である生活科の主任を任された、学校の中核となるべき人であるという認識を持ってほしい。

今日の話の中心である「気付きの質」とは、「生きて働く知識・技能の習得」の中の知識の部分である。気付きの質を高めていくことで、他教科等の知識及び技能のところにつながっていくものを育成している。今日の目的は、『「気付きの質を高める」という視点から具体的な子供の学びをとらえることを通して、授業改善に向けたイメージをもつことができる。』とした。



① 気づきの質を高める

「気づきの質が高まった」とはどういうことか。授業中に見られる気づきは2つある。1つ目に、子供たちは、活動や体験の中で没頭しているときは無自覚な気づきである。それを教師が意図的に声で表出させたり、振り返りで書かせたりすることで、子供たちは初めて気づきを自覚化する。2つ目に、自分一人で気付いても、広がったり深まったりしない。そのため、友達と交流をしたり、話したりする中で友達の気づきと自分の気づきが組み合わさり、関係付けられた新しい気づきが生まれる。

授業を作っていくときに、気づきの質を高めるためには、「いかに子供たちが気づきを自覚しているか」、「自分の持っている気づきと友達の気づきが組み合わさって新しい気づきが生まれているか」ということを中心に見取っていくと、子供たちの学びの見方や、教師の声の掛け方が変わる。

それらを踏まえたうえで、子供たち自身の気持ちの変化など、対象についての気づきから自分自身への気づきにつなげていく。気づきをテーマにした理由は、生活科は「気づきの質の高まり＝深い学び」だからである。ぜひ深い学びに向けて、気づきの質を高めることを頑張してほしい。

② 幼児期の学びとつなぐ

現在、幼稚園、保育所、認定こども園では子供たちは、保育だけでなく教育を受けている。その中で幼児期では、遊びを多様に展開して学んでいる。園での学びと小学校の学びはつながっているという意識を小学校側の教員が持たなければならない。園での学びは、小学校の内容の前倒しではなく、遊びこみをするを重視することで、小学校での学びこみにつながる。しかし、その点でギャップがあるため、小学校側では「スタートカリキュラム」が必要である。

1年生だけを特別扱いをするのではなく、学校体制で1年生を育てていく。学校探検の際も、1年生の先生が他学年の先生に遠慮するのではなく、他学年の先生や子供たちが、「今は1年生が学校探検をして、いろいろな発見をする時期である」ことを学校全体で共有できているだけで受け入れ方が変わる。生活科主任として、どのようにスタートカリキュラムを取り組んでいくか考えてほしい。幼児期の学びを教師全員で学んでいこうという雰囲気づくりを研修等で培っていききたい。

③ 中学年以降の学びとつなぐ

生活科は、中学年の学びと密接につながっている。例えば、1年生の学校探検は、2年生の町探検につながり、3年生社会科の地域学習につながる。町探検を通して、地域に愛着をもつ子供を育ててほしい。また、おもちゃ作りは、理科と密接につながる。おもちゃ作りを通して、遊びを作り出す面白さや自然の不思議さを気付かせたい。これらの学び方としては、総合との接続を意識してほしい。